

「アジア主義」者のタイ国進出

—明治中期の一面—

吉 川 利 治*

The Asianists in Thailand in the Middle of the Meiji Era

Toshiharu YOSHIKAWA

In the last two decades of the nineteenth century, there were several Asianists interested in Southeast Asia in Japan. They advocated the view that Asian nations needed solidarity against the European advance into Asia. Manjiro Inagaki, who was the first Japanese resident ambassador to Thailand, was an Asianist. He made every endeavour to send a Japanese advisor to the Thai government in the reign of King Chulalongkorn for Thailand's modernization and Japanese interests.

Uzaburo Ishibashi and Chinatsu Iwamoto were also passionate Asianists. They went to Thailand to support the independence of Thailand, after hearing that relations between Thailand and France had worsened after the incident at Paknam, near Bangkok, in 1893. After arriving in Bangkok, they began to encourage Japanese immigration under the sponsorship of Phraya Surasakmontri, the Thai minister of agriculture and commerce, with the aim of helping Thailand, but they failed in their undertaking because they had no business ability.

は じ め に

日清戦争前後から日露戦争へ向かう明治時代中期の日本では西欧列強のアジア進出の切迫を感じて、「北守南進論」や「脱亜入欧論」など、日本が執るべき対外政策が政治家、思想家の間で議論されていた。「北守論」は朝鮮との「合邦論」や中国との「日清同盟論」など「アジア連帯論」ないしは「アジア主義」となり、「脱亜論」とからんで発展していくが、「南進論」はむしろ植民開拓や領土拡張、通商貿易の発展という見地から大らかに議論が展開されていた。しかし、東南アジアで独立を維持していた唯一の国、タイ国¹⁾に対しては、英仏両大国に挟まれた弱小国タイへ同情を寄せ、英仏による侵略の危機からタイ国を救おうとする志士の日本人の動きや、「日暹同盟論」とも呼ぶべき「アジア主義」につらなる思想が見られた。

一方のタイ国においても、かろうじて独立は維持しているものの、旧態依然たる政治機構の

* 大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科

1) 当時は「シャム」と呼び「暹羅」の漢字を用いていた。本稿では現在の国名「タイ国」を用いるが、引用文やその他で適宜「暹羅」や略称「暹」を用いる。

ままでは英仏両国からの侵略を容易に受け、独立さえ危いという危機感をヨーロッパ留学を終えた若い王弟や少壮貴族たちが抱き、行政改革や旧制度の近代化が緊急に必要であると、当時の国王チュラーロンコーンに訴えていた。なかでも日本を近代化のモデルにしようとする発想が語られ、一部の指導者層には日本側の対外活動に呼応しようとする動きさえ見られた。小稿では明治20年代から30年代にかけて、日本側から政治的にタイ国へかかわり合いを持つ人々と、かかわっていく側のタイ国の政治家との双方に、人脈と呼ぶことができそうな人間関係とその思想の流れを見出そうと試みた。

I 「平戸の三傑」と「北守南進論」

明治20年代に風靡した世論に「北守南進論」がある。この「北守南進論」を世論に訴えるのに重要な役割を果たした思想家、政治家については、既に先学による研究がなされているので、ここでは長崎県平戸の旧松浦藩出身の3人、浦敬一、菅沼貞風、稲垣満次郎に注目したい。とりわけ稲垣は初代タイ国駐劄公使として渡タイし、日本人顧問をタイ政府部内へ送り込むのに努力した外交官でもあった。

3人の郷里平戸については、菅沼が明治21年（1888）に著わしたといわれる「平戸貿易志」²⁾に詳しい。平戸が賑いを見せたのは「後奈良天皇の御代天文18年に始まり、明正天皇の御代寛永17年に終る」³⁾ 1549年から1640年の92年間としている。その間、最初はポルトガル人、スペイン人、次いでオランダ人が渡来して貿易をしていた。江戸に徳川幕府が成立しても、オランダは平戸に商館を開設して貿易を続けた。ところが1635年の鎖国令によって、外国船の入港、貿易が長崎に限られ、1640年平戸オランダ商館を破壊するに及んで、平戸は寒村となって歴史の彼方に埋もれてしまった。しかし平戸は古代より遣唐使を乗せた船の寄港地となり中国貿易の中継地となって、また中世には「呂宋、安南、暹羅、満刺加等に歴市」⁴⁾する海賊の根拠地として栄え、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人とのいわゆる南蛮貿易や御朱印船の寄港地として、「其の貿易より生じたる結果の我国の全局に及ぼしたる効験は業に已に此の如くなりしとすれば、此港の事跡豈遂に湮滅に附すべけんや。」⁵⁾と、郷里平戸が果たしてきた役割を菅沼は多くの史料文献を渉猟して熱を込めて書き上げている。明治の開国は平戸の人々にとって捲土重来の機会と映り、辺鄙な土地にありながら海外への関心をかきたてていた。

貧しい士族の子であった菅沼は、昼は郡役所に勤め、夜は旧藩主松浦伯が明治13年に開設した猶興書院で学び、史料蒐集の任にあたっていた。⁶⁾ 明治17年1月（1884）には猶興書院の契

2) 菅沼貞風『大日本商業史』東京：岩波書店（昭和15年）に併載。

3) 「同上論文」p. 525.

4) 「同上論文」p. 526.

5) 「同上論文」p. 533.

6) 福本誠「菅沼貞風君伝」『大日本商業史』p. 2.

学生となり、東京の松浦家の書生宿泊所に滞在することとなった。当時、東京の松浦家の書生宿泊所に寄宿する平戸出身の学生に、浦敬一、稲垣満次郎らがいた。浦は松浦藩侯の諸公子の御学友として上京したが、明治10年(1877)に一時平戸に戻り、明治14年(1881)再び上京して、松浦家より学資の支給を受けながら専修学校で政治法律を学び、16年(1883)には卒業していた。⁷⁾卒業後も引き続き同校の科外講義を聴き、松浦家邸内の書生宿泊所で後輩の指導にあたった。稲垣は浦よりも1歳若い文久元年に平戸の藩士の家に生まれている。⁸⁾浦と同時期に東京に遊学し、明治18年(1885)旧藩主松浦家の若殿松浦厚に同行して英国ケンブリッジ大学に留学した。⁹⁾菅沼の上京から稲垣の留学までわずか2年足らずであったが、明治17年(1884)朝鮮で起こった「甲申事変」に際しては、浦が菅沼らを誘って副島種臣を訪ねたり、¹⁰⁾稲垣の留学中も菅沼と稲垣の間に書簡の往復があったり、松浦邸の宿泊所で平戸出身の3人は、日本をめぐる国際関係に非常な関心を高めていた。

菅沼は稲垣にあてた手簡の中で、「我国の独立を維持し、且国権を拡張する上策は朝鮮を助けて独立の基礎を固うせしめ、呂宋の独立を恢復して我国に連合するの外に有之まじく存候。」¹¹⁾と述べ、北に対しては朝鮮、南は呂宋すなわちフィリピンに注目して、各々の独立を計り日本に連合させるが、「其の王位は之を我国の天皇に捧げ奉る」¹²⁾のであるから、日本の属国にしようとしたのであった。「安南、暹羅の如き緬甸天竺の如き之を恢復して独立せしむるときは以て東洋の元気を鼓舞するに足るもの亦少からず候。然れども是等は別に独立の一国を組織すべき地にして決して我国天皇陛下の版図に属せしむべきものに無之と存じ候。」¹³⁾日本を中心に、朝鮮、フィリピンは日本に帰属せしめ、ベトナム、タイ、ビルマ、インド、その外周に位置する諸国は独立国家にし、日本と連帯させて西欧列強に対抗しようと考えた。菅沼のアジア論は明治21年(1888)に書いた「変小為大転敗為勝 新日本の図南の夢」¹⁴⁾でますます鮮明かつ具体的になる。フィリピンは「天公が暫らく他人に預置ける新日本の好版図」¹⁵⁾であり、フィリピンこそが日本の過剰人口を吸収する楽土であり、農業移民のための出稼ぎ会社を一日も早く設立するよう説いている。また他の東南アジア諸国に対しては「安南は既に仏に折れ緬甸も亦英に入る、吾人の取るべきものは殆んど暹羅なるが如し。然れども暹羅は安南緬甸に境し、我国にして之を略取するときは英仏の二国と争端を開くことは常に絶ゆることなかるべし。況んや暹羅は固より東洋の独立国、而して吾人が敵にあらざるや。吾人豈之を暴滅して以て欧州諸

7) 黒龍会『東亜先覚志士記伝』下巻、東京：原書房（昭和41年）pp. 403-404.

8) 平戸尋常高等小学校編『平戸郷土誌』平戸（大正6年）p. 312.

9) 『同上書』p. 314.

10) 黒龍会『前掲書』pp. 750-751.

11) 菅沼「前掲論文」p. 697.

12) 菅沼「前掲論文」p. 698.

13) 菅沼「前掲論文」p. 700.

14) 菅沼『前掲書』に所載。

15) 菅沼「前掲論文」p. 691.

国が豺狼の仕業に習ふに忍びんや。吾人は寧ろ雄偉卓犖の士が躍って暹羅に入りて其の政府に翼賛し、国政を整理し兵備を完修し、私かに安南に通じて支那に結び、以て安南を恢復して仏人を東洋より放逐し、北、支那に当り西、英に当り、卓然として我国南隣の好同盟国たらしめんことを希望するものなり。」¹⁶⁾ 明治20年前後は、「内国殖民論」から「海外殖民論」へという海外移住思想の転換の時期にあたり、太平洋地域における諸列強の領土獲得の動きが激しくなったという事実があった。¹⁷⁾ 菅沼もまたこの時代の流れの中で「南進論」を書き上げたが、東南アジアの独立を計り英仏の進出を阻止しようと論じた点や、特に独立国タイに対しては、それを維持するための国内の近代化に日本が手を貸そうという「アジア主義」的発想が見られる。この東南アジアに対する「アジア主義」的発想は同郷の稲垣や石橋禹三郎らに多分に影響を与え、実践への一步が試みられることになる。菅沼は明治21年（1888）に東京帝大を卒業し一時は高等商業学校に奉職したが翌年には辞職し、同年4月にフィリピンのマニラに向かいわずか5カ月の滞在で病死した。¹⁸⁾

菅沼より5年先輩の浦は、一時陸軍で知識を得たり、新聞編集に携わったりしたが、明治20年中国に渡り、荒尾精の経営する漢口の楽善堂に身を投じて中国や辺境の状況を調査していた。明治21年（1888）にロシアがシベリア鉄道敷設を発表すると、翌年ロシアの東侵を防御する方策を見出すべくイリ地方へロシア軍の動静を探りに旅立ち、新疆地方で消息を断った。¹⁹⁾

後世に「平戸の三傑」と呼ばれるようになる菅沼、浦が各々の「北守南進論」に自らの命を賭けて異境に消えていった時、稲垣はまだ英国留学中であった。明治23年（1890）にカナダ、太平洋を経由して帰国すると、翌年には留学先ケンブリッジ大学に提出した卒業論文“Japan and The Pacific. A Japanese View of The Eastern Question.”（『東方策』）および“A History of The Migration of Centres of Commercial and Industrial Energies of The World.”（『世界商工業焼点変遷史』）の訳を『東方策』第1編、第2編として出版し、各々5版、3版と版を重ねた。そしてさらに『東方策結論草案』を出版した。第1編は主として英国とロシアのアジア政策の歴史変遷を述べ、英国、ロシアのアジア進出から日本を守るためには中立を守り、太平洋の主権を握ることであると説いている。特に、菅沼のフィリピン属国化に対し、稲垣は「台湾島を本府とし、精鋭の軍艦を以て太平洋中に立たば何れの国たるを論せず、南北支那の大権及び香港より濠州、巴拿馬、尼加刺瓦、桑港、バンコバー、日本、上海に至る太平洋航海の全権を握ることを得べし。」²⁰⁾と述べ、『東方策結論草案』でも「今大勢上より論ずれば台湾の位置は即ち東洋のコンスタンチノーブルとも云ふべし。故に日本は国策的の眼を以て此台

16) 菅沼「前掲論文」pp. 656-657.

17) 矢野暢『「南進」の系譜』東京：中央公論社（昭和50年）pp. 66-67.

18) 福本「前掲論文」p. 6.

19) 黒龍会『前掲書』pp. 404-405.

20) 稲垣満次郎『東方策』第1編、東京（明治24年）p. 95.

湾に最も注視せざるべからず。』²¹⁾と繰り返し台湾の重要性を強調している。稲垣がかつて自分に「支那と戦争大嫌。」と語ったと、菅沼が稲垣宛の手簡で触れているとおり、稲垣の関心領域は太平洋にあり、太平洋の通商交易の実権を日本が握ることを基本とし、その手段として、各国と通商条約を締結して、外交活動を盛んにすることを挙げている。特に商業上の市場獲得には軍事力で外征するのも19世紀においては理由が立つとしながらも、「仮令戦い勝つも外交に負くるが如きあらば、何の効か是れあらん、是れ既に我が国の経験する所ならずや。』²²⁾と、外交活動が重大な役割を果たしていることを強調した。稲垣が植民に関心を示すのは、明治25年(1892)オーストラリア視察を終えてからである。人口増加のはけ口として、また商業サービス業上のはけ口として植民地の必要性を説いている。²³⁾ 国威発揚と通商の拡張を主唱する思想は、既に田口卯吉による明治11年(1878)の『自由交易、日本経済論』に展開されていて、その場としての南洋も明治20年代に大きな思潮をなしたが、通商条約の締結と外交官の派遣という外交手段に着目したのは、稲垣の創見であった。しかも、「南洋」と呼ばずに「太平洋」と呼ぶ稲垣のセンスは、その後の外交官としての彼の人生の中に生かされていく。『東方策』第1編には、英国での恩師のみならず、英国総理大臣、各国駐英大使らおよそ20人の欧州政外交界の著名人からのことばを序文に掲げ、既に華やかな交際ぶりを印象づけている。人に感銘を与えずにはおかない話術の巧みさ、²⁴⁾ 加えてイギリスで磨きあげた語学力は、稲垣に外交官への道を歩ませ、外交を通じて理論の実践を可能にしようとした。

II タイの近代化と「アジア主義」者たち

明治20年代のタイ国は、ラーマ5世チュラーロンコーン王(Chulalongkōn)の主導による上からの立法、行政、司法にわたる政治改革が行なわれようとしていた。チュラーロンコーンは父王の病死にともない明治元年(1868)に即位したが、当時わずか15歳の未成年であったため、父王の登位に貢献した老練な政治家ソムデット・チャオプラヤー・マハーシースリヤウォン(Somdet Ćhaophraya Mahasisuriyawong, 以下スリヤウォンと略す。)が摂政となった。現チャックリー(Ćhakkri)王朝のラーマ1世以来宮廷政治の枢要な地位をほとんど独占し、チャックリー王家に対抗するだけの政治的経済的実権をたくわえていたブンナーク(Bunnak)家を代表する人物が、このスリヤウォンであった。チュラーロンコーンが20歳になった明治6年(1873)、自己の権限を宮廷の内外に明示するため、2回目の即位式を挙行し、いくつかの合理

21) 稲垣満次郎『東方策結論草案』上巻、東京(明治25年) p. 112.

22) 稲垣満次郎『外交と外征』東京：民友社(明治29年) pp. 159-160.

23) 稲垣満次郎「南洋の実勢」『東邦協会報告』第24。

24) このことについては、『大日本商業史』の「跋」を書いた武藤長蔵が次のように述べている。「私は東京高等商業学校在学中、菅沼氏と同郷の先輩稲垣満次郎氏の講演を聴いた事がある。同氏の講演は私と同級の一二人の者に或る感銘を与へそれ等の青年は氏の講演に動かされてシャムに航した。しかし仕事は成功しなかった様である。兎も角稲垣氏の人々に与える力の少なからざるを知る事が出来る。」

的な改革に着手した。まず奴隷制の廃止、財政、法制度の改革、行政機構の近代化などに手をつけ、ある程度の成果を得たものの、既得権益を守ろうとする「保守派」²⁵⁾や副王ウィチャイチャーン (Wichaichan) を中心とする「旧守派」²⁶⁾の警戒や抵抗にあった。とりわけ前王宮に私兵をたくわえて住むウィチャイチャーンが明治7年(1874)末に起こした、正王宮を放火し襲撃するという事件「前王宮事件」²⁷⁾は、イギリス領事館をも事件に巻き込み、外国勢力の介入を招きかねない国家の緊急事態にまで発展した。からくも外国勢力の介入を免れたものの、「前王宮事件」はチュラーロンコーンにとり「不必要とさえ思われる程の痛みを持って認識され」²⁸⁾その後10年は改革を思いとどまらしめるほどの衝撃を与えた。この事件を契機に、理想主義者チュラーロンコーンは理念先行型の観念的改革論から、現実主義との調和感覚をそなえた偉大な政治家へと脱皮していった。

明治10年代は「保守派」の領袖スリヤウォンの死(明15, 1882)、副王ウィチャイチャーンの死(明18, 1885)、および「保守派」の大物政治家の引退が相次ぎ、旧勢力は急激な弱まりを見せた。一方、チュラーロンコーンを主導者とする「革新派」²⁹⁾では、チュラーロンコーンの王弟たちがヨーロッパ留学を終えて幾人かが帰国し、またスリヤウォンの弟や息子たちの中にも「革新派」に加わる者がいた。そして「革新派」の中でも、欧州留学や外交官として欧州滞在経験を持つ王弟と少壮貴族による「国家体制変革に関する王族および官僚による建白書」³⁰⁾が明治18年(1885)1月チュラーロンコーンに上奏された。同年、チャムーン・ワイウォーラナート (Čhamŭn Waiwōranat, のちにプレーヤー・スラサックモントリーとなる。) が同じく「国家体制変革に関する建白書」³¹⁾を上奏した。前者の11名による建白書は長文にわたっている。タイが英仏両大国の植民地として分割される危機が迫り、特にフランスの進出は当面のタイにとって最も危険な存在である、しかも友好条約の締結は何ら役に立たず、不平等条約の改正さえとうてい無理である、独立を維持するための唯一の方法は統治形態をヨーロッパ化することである、と説き、日本はアジア諸国で唯一の「欧化」を進めている国家であり、「今では欧州諸国と同等の権利を持つべきと主張し始め、欧州諸国も日本の法律制度の整備を待って不平等

25) Wyatt, David K. 1969. *The Politics of Reform in Thailand*. Bangkok: Thai Wattana Panich, p. 46.

26) *ibid.*, p. 48. 「保守派」と「旧守派」の相違は前者が不可避の現状の改善を認めるのに対し、後者は全ての変化を恐れ現状維持に腐心する点。

27) Sutthisongkham, Natthawut. 1966. *Somdet phranang rua lom. Odiansato*. (『溺死王妃』) と、同じ著者による 1960. *Somdet ĕhaophraya bōrom mahasisuriyawong*. 2 Vols. (『ソムデット・チャオプレーヤー・ボロム・マハーシースリヤウォン』) に詳しい。

28) Wyatt, *op. cit.*, p. 62.

29) Wyatt, *op. cit.*, p. 86.

30) Krom Sinlapakōn. 1967. *Čhaonai lae kharatchaōan krap bankhom thun khwam hen ĕhat kan plianplaeng ratchakan phaendin rō. sō. 103*. pp. 1-46.

31) Krom Sinlapakōn. 1967. *Čhamŭn Waiwōranat thun klao thawai khwam hen rūang ĕhat kan plianplaeng rabiap ratchakan phaendin ĕhō. sō. 1247*. pp. 47-52. この書は上記の書と合わせて配布本の形で出版されている。

条約の改正を認めようとしている。』³²⁾と、日本の「欧化」ぶりがいかに効果をあげているかを語り、ひるがえってタイ国の場合も「日本の如く歩むなら、ヨーロッパ諸国もタイを対等に扱い、タイに敬意を抱くであろう。世界に通用する法体制を持つ国の一つに仲間入りすることが、国の安全を守り、タイの独立を永久に維持する道である。』³³⁾から、当面まず手がけるべきは憲法制定であり、立憲君主制を目指すべきであると提言している。この建白書で触れられている日本に関する知識は、直接の見聞によるものではなく、英字新聞の報道によったものらしく、この建白書が上奏された時には、新聞の切り抜きが添付されていたという。³⁴⁾チャムーン・ワイウォーラナートは当初、王族たちの建白書に連署するつもりであったが、³⁵⁾かなりの意見の相違を見たのであろう。単独で同年3月に建白書を上奏した。前者の建白書に比べ、文は短く穏健な内容を持ち、拙速を戒めて、「まず国家の安寧とあまねく国民の幸福を計って後、兵力の増強にあたるべきである。それはあたかも日本が歩んできたのと同じパターンである。』³⁶⁾と、日本の「富国強兵策」に則ることを提案している。ふたつの建白書では共に、日本が着々と近代化を進める新興国家のイメージで語られ、タイ国の近代化の模範として挙げられているが、前者の建白書は日本の「入欧」的な局面が強調され、後者では「富国強兵」的な局面が強調されている。前者の建白書に連署した11名全員がヨーロッパ駐在の外交官や留学生で占められ、ヨーロッパの制度や慣習に親しんできた王族や貴族であったこと、³⁷⁾後者は貴族出身の軍人、政界の実力者であったことが、³⁸⁾日本の近代化を見る局面の違いをあらわしている。

ふたつの建白書に対してチュラーロンコーンの回答は、タイが緊急に必要とするのは(1)統治機構の改革、(2)近代法の起草者、と簡単に述べ、³⁹⁾2年後に「国家統治改革に関する解

32) Krom Sinlapakōn. *Čhaonai lae kharatchakan*. p. 18.

33) Krom Sinlapakōn. *Čhaonai lae kharatchakan*. p. 26.

34) Krom Sinlapakōn. *Čhaonai lae kharatchakan*. p. 8.

35) Samutwanit, Čhaianan. 1977. *Kanmūangkan plianplaeng thang kanmūang thai phō. sō. 2411-2475.* (*Politics and Political Change in Thailand.*) Samakhom sangkhommasat haeng prathet thai.

36) Krom Sinlapakōn. *Čhamūn Waiwōranat*. p. 52.

37) 11人とは、Naretwōrarit 親王, Phitthayalapphrūtthithada 親王, Sawatwatthanawisit 親王, Prūtsadang 親王の王族4人と、Phraya Damrongratchaphonkhan, Luang Detnaiwen, Luang Wisetsali, But Phenkun, Khun Patiphanphičhit, Plian, Saat 少尉の7名からなる。ほとんどが在英タイ公使館駐在の外交官であった。王族4人の経歴については Samutwanit, Čhaianan. 1970. *Phaen patthana kanmūang chabap raek khōng thai: kham krap bankhom thun khwam hen čhat kan plianplaeng ratchakan phaendin rō. sō. 103.* (『タイ国最初の政治開発計画書：国家体制変革に関する建白書』)に詳しい。

38) 最後には Čhaophraya Surasakmontri の爵位を下賜される。スラサックモンتریの伝記として、Čhaophraya Surasakmontri. 1960-1961. *Prawatkan khōng čhōmphon čhaophraya surasakmontri*. Vols. 1-4, Khurusapha. (『チャオプラーヤー・スラサックモンتری元帥自伝』)と、Thainōi. 1964. *Čhōmphon čhaophraya surasakmontri*. Phrae phitthaya. (『チャオプラーヤー・スラサックモンتری元帥』)がある。

39) Krom Sinlapakōn. 1967. *Phraratchadamrat tōp khwam hen khōng phu čha hai plian kanpokkhōng Čhō. sō. 1247 (1885).* pp. 53-60.

説」⁴⁰⁾という表題の趣意書を発表し、行政、司法機構にわたる具体的な新構想を提示した。しかし、前者の建白書に盛られた立憲君主制をはじめ、権利と義務、言論思想の自由など近代的な政治思想には全く触れず、国家の発展にともなう生じた様々な不合理を是正し、合理的な近代化を行なうためであると、統治者の威光をいささかもくずさない、絶対化への自信のほどを示した。

建白書が上奏された同年、チャオプラヤー・パースウォンマハーコーサーティボディー (Čhaophraya Phanuwongmahakosathibōdi) が外務大臣を辞任し、後任として王弟クロマルワン・テーワウォンワローパカーン親王 (Krommaluang Thewawongwaropakan, 以下テーワウォンと略す。) が就任した。テーワウォンは当時27歳の若さであった。明治20年(1887)の英国ビクトリア女王即位50周年記念式典に参列したテーワウォンは、フランス、スウェーデン、ドイツを視察し、帰路アメリカ、日本に立ち寄った。⁴¹⁾この時、日本側からタイとの新たな外交関係の樹立が申し出され、明治20年(1887)9月26日、和親通商に関する宣言書に調印し、翌年1月23日に批准書を交換した。⁴²⁾外遊を終えたテーワウォンは明治21年(1888)帰朝報告を兼ねて内閣の創設を進言したが、⁴³⁾明治25年(1892)4月1日にようやくチュラーロンコーンが12省に改廃増設し、各省大臣を任命した。⁴⁴⁾

このころ、フランスのインドシナ半島における西漸は速度をはやめ、既に北ラオスではタイの宗主権をめぐるタイ軍とフランス軍がしばしば衝突を繰り返していた。明治18年(1885)チュラーロンコーンは当時陸軍の近代的組織作りにあたっていたチャムーン・ワイウォーラナートを、北ラオスと北ベトナムの国境地帯シップソーンチュタイとホワパンタンハータンホッ

40) Krom Sinlapakōn. 1967. *Phraratchadamrat nai phrabat somdet phračhunlačhōmklaō čhao yu hua song thalaeng phrabōrom rachathibai kaekhai kanpokkhōng phaendin*. pp. 61-108.

41) Pramuanwitthaya, Udom. 1962. *100 čhaofa lae senabōdi*. Khlangwitthaya (『100人の王子と大臣』), pp. 439-440.

42) 外務省情報部「日暹修好50年の回顧」『暹羅協会々報』第9号(日暹修好50周年記念特集号)(昭和12年) p. 65.; Pramuanwitthaya, *op. cit.*, pp. 439-440.

43) Pramuanwitthaya, *op. cit.*, p. 440.

44) Damrongrachanuphap, Somdet phračhao bōromwongthoe. 1960. *Thesaphiban*. Krom Sinlapakōn, p. 6. この時の12省大臣は次の通りである。

国防省	Čhaophraya Rattanathibet
外務省	Thewawongwaropakan 親王
大蔵省	Čhakkaphatphong 親王
宮内省	Pračhaksinlapakhom 親王
首都省	Naretwōrarit 親王
土木省	Naritsaranuwattiwong 親王
文部省	Čhaophraya Phatsakōrawong
農商務省	Phraya Surasakmontri
法務省	Sawatsophon 親王
内務省	Damrongrachanuphap 親王
玉璽省	Phitthayalapphrūtthithada 親王
参謀本部	Phanurangsisawangwong 親王

ク地方に派遣して、明治20年(1887)にはひとまずラオスにおけるタイの宗主権を維持することができた。⁴⁵⁾ チャムーン・ワイウォーラナートはこの功績によってプラーヤー・スラサックモントリー(Phraya Surasakmontri, 以下スラサックモントリーと略す。)の欽賜名と爵位を受けた。だが明治26年(1893)に再び生じた国境紛争で、フランスはメコン河東岸のラオス全土の割譲を要求し、同年7月16日にはフランスの砲艦2隻がメナム・チャオプラーヤーを遡航して、バンコクのフランス公使館の向かい側に停泊し、バンコク市を威嚇しながらタイ側に最後通牒を送った。結局10月3日、タイ国はフランスにメコン河東岸を割譲し賠償金を支払うことになった。⁴⁶⁾

この事件は世界的に報道され、日本では「暹仏事件」と呼んで、強大国フランスに強引に侵略される弱小国タイに同情が集まった。義憤を感じ行動を起こした日本人のひとりに石橋禹三郎がいた。石橋は明治2年平戸の呉服太物商の家に生まれ、明治16年福岡英語学校を卒業、上京して東京成立学校を卒業し、英語教師デニングの紹介で渡米していた。⁴⁷⁾アメリカでは実業専門学校で学んでいたが、明治24年(1891)のチリ革命戦争には義勇軍に加わり、翌年平戸に帰ってきた。郷里で菅沼貞風や浦敬一の遺志を継ぐ者がいないと歎いている折しも、「暹仏事件」のニュースに接し、植民計画を携えて渡タイすることになった。明治27年(1894)の出発前には熊本の津田静一、宮崎寅藏(滔天)らを訪ねてタイ植民計画に関する意見を交換していた。⁴⁸⁾石橋のタイ国での事業は(1)植民事業を拡大して日本の潜在的勢力を作ること、(2)政府部内に日本人を入れること、(3)鉄道株を買い占めること、(4)マラヤ半島を買い入れること、⁴⁹⁾を目的としていた。石橋はこの計画を上海にいる友人郡島忠次郎に寄せ、同年3月11日付の書面で開陳し、「右は暹羅に対する不親切の様なれども我党の目的は白人と中央亜細亜に敏腕を争ふにあれば、事苟も東洋の安危に関するものなり、依って以上の四ヶ条を実行することを期す。」⁵⁰⁾と述べている。移民事業は当時の流行であったが、政府部内に日本人を入れる案は同郷の先輩菅沼の発想であり、鉄道を重視することは稲垣の著書『西比利亜鉄道論』⁵¹⁾で有名であった。石橋のいう「我党」とは石橋に従って渡航した同郷の青年荒川雅五郎、松野恭三郎を指すものと思われる。⁵²⁾

45) Čhaophraya Surasakmontri, *op. cit.*, Vol. 3, pp. 42-43.

46) Chumsai, Mani. 1976. *Ekkasan prawattisat thai wa duai rō. sō. 112 čhak faem kao sūng kep wai na tai thun sathanthut thai na krung parit*. Chaloeinrit (『パリ駐在タイ国大使館地下室に保存されていた旧ファイルによる1893年事件に関する史料』), pp. 57-64.; Duke, Pensri (Suvani). 1962. *Leo relations entre la France et la Thaïlande (Siam)*. Chalermnit, Bangkok, p. 169.

47) 平戸尋常高等小学校編『前掲書』p. 298.

48) 黒龍会『前掲書』p. 47.

49) 黒龍会『前掲書』p. 48.

50) 黒龍会『前掲書』p. 48.

51) 稲垣の兄、雄太郎はウラジオストックに10数年滞在し、商業を営みながら視察調査した資料が参考にされているという。

52) 石橋がバンコクで商売を始めたころ、さらに平戸から山田貞二、佐志雅雄が渡タイする。

フランスのタイ恫喝に憤慨して渡タイしたもうひとりの日本人がいた。土佐出身の岩本千綱である。岩本は陸軍幼年学校、陸軍士官学校を卒業して陸軍中尉になっていたが、政治に熱中するあまり、明治25年（1892）軍職を投げ打ってタイ国に向かった。⁵³⁾当時タイ国では、テークワウォンの来日の際、随行者のひとりプレーヤー・パーッサコーラウォン（Phraya Phatsakōra-wong, 以下パーッサコーラウォンと略す。）が連れて帰ったふたりの日本人青年、山本安太郎と山本鋳介が文部大臣パーッサコーラウォンの下で働いていた。岩本は安太郎の父の紹介状を持って渡タイし、安太郎を通じてパーッサコーラウォンの世話になり、⁵⁴⁾そのうち「暹仏事件」の司令官でありタイの英雄である農商務大臣スラサックモンتریの知遇を得た。岩本は明治26年（1893）にタイ国の窮状を訴えに日本に帰国したが、ほとんど反応はなく、フランス砲艦のメナム・チャオプレーヤー河口封鎖の報を聞いて再びタイ国に渡った。バンコクでは同じ動機で渡タイした石橋と知り合い、石橋の移民事業を実行に移すことになった。岩本と石橋は日本人移民計画をタイ側の指導者に説いてまわった。この計画を積極的に推進しようとしたタイ側の政治家がスラサックモンتریであった。「暹羅殖民会社」が岩本らによって設立されたのもスラサックモンتریの発案であった。⁵⁵⁾日本人のタイ入植にあたり、運営資金、土地、農具の全てをスラサックモンتریが提供した。⁵⁶⁾日本人の入植地として予定されていた土地サパトゥム⁵⁷⁾1,600ライ（＝250余町）は、かつてスラサックモンتریが軍隊増強のための志願兵 5,000名を募り、その臨時の兵舎を建てた地区であった。⁵⁸⁾陸軍近衛隊司令官時代のスラサックモンتریは部隊の再編、軍規粛正、汚職の追放、陸軍士官学校の創設など、もっぱら「強兵策」にあたるタイ陸軍の近代化に尽力したが、明治25年（1892）農商務大臣就任後はバンコク北部のランシット運河の開削、チュラーロンコーン水門、サワパー水門の建設を手がけた。⁵⁹⁾日本人移民を積極的に受け容れようとしたのも、水利運河の開発にともなう新開地への入植者を必要としていたからであり、日本人移民策を自らの説く「富国策」に役立てるつもりであったと考えられる。

当時、日本では「日本吉佐移民会社」（明24）、榎本武揚の「殖民協会」（明26）が設立され、移民周旋人が活躍していた。⁶⁰⁾岩本も明治28年（1895）「広島移民海外渡航株式会社」⁶¹⁾を頼

53) 黒龍会『前掲書』p. 29.

54) 岩本千綱「暹羅談」『東邦協会報告』第25, p. 25.

55) 宮崎滔天「暹羅遠征の懐旧録」『東方時論』大正6年2月号, p. 133.

56) 宮崎滔天『宮崎滔天全集』第5巻, 平凡社（昭和51年）p. 101.

57) 「蓮花池」の意味。現在はパトゥムワンと呼んでいるバンコク市内の地区。

58) Thainōi, *op. cit.*, p. 135. スラサックモンتریの部下でこの志願兵部隊の指揮をした Naičha Yuat は、のちに Phraya Ritthirongronnachet となり、明治32年（1899）初代タイ国全権公使として日本に派遣されている。

59) Thainōi, *op. cit.*, p. 691.

60) 入江寅吉『邦人海外発展史』下巻, 移民問題研究会（昭和13年）p. 519, p. 525.

61) 宮崎『前掲書』p. 106.

って移民を募ったが、でたらめな契約を交わし、しかもタイ国の農繁期に無頓着であったため、渡タイした日本人は全て逃散して農業に従事する者なく、移民計画はさんざんな結果となった。岩本に頼まれて「広島移民海外渡航株式会社」の代理人になり渡タイした宮崎滔天は、「其大目的たる農業の実験をなして成敗の事実証明し得たるものなきは、暹羅殖民の爲めに大に悲まざるを得ざる処にして、殊に日本人の移植に熱心なるスリサック侯（スラサックモン 트리、筆者注）をして幾千の金員を支出せしめ、徒に龍頭蛇尾の演劇を觀ぜしめたるは、吾人日本人として慚愧に堪へざる所也。」⁶²⁾と歎いた。岩本はスラサックモントリの面目を潰したためバンコクにいづらくなり、山本鋳介をともないラオス、ベトナムの奥地探検と称してタイから姿を消した。⁶³⁾ 石橋はしばらくバンコクで商業を営むが、いずれもすぐ経営難に陥り、出資者を求めて明治28年(1895)に帰国したのち、病に臥し明治31年(1898)東京で死亡した。⁶⁴⁾ 宮崎は明治29年(1896)残留者を集め、もう一度農業移民としてバンコクのサーラーデーンの土地をスラサックモントリから借り上げて耕すが、旱魃のため収穫ならず、⁶⁵⁾あきらめて、当時来日していた孫文との出会いを求めて帰国してしまった。⁶⁶⁾意気に感じて日本から渡タイした志士たちも、勝手違ったタイ国で慣れぬ移民事業に手を出したばかりに、全てが烏有に帰してしまった。タイ側の親日家スラサックモントリにとって、事態はもっと深刻であった。スラサックモントリがタイ政府から借りていた金額は総額8万バーツにもなり、⁶⁷⁾潔癖性のスラサックモントリは借金返済のため、チュラーロンコーンから下賜されたサーラーデーンの屋敷と土地を差し出し、明治30年(1897)には自ら農商務大臣の地位を辞して政界から去り、東南タイ、チョンブリー県のシーラーチャーで森林業を営み始めた。⁶⁸⁾だが不運は続き、経理を任せた華僑にだまされ借金はかえってふえ、ランシット運河沿いに所有していた1,000ライの田地も借金の返済に取り上げられてしまった。⁶⁹⁾

III 稲垣満次郎と日本人顧問

明治の日本政府が東南アジア諸国と外交関係を結ぶ最初は、明治20年(1887)のタイ国との間に結ばれた和親通商に関する宣言だろう。翌年にはフィリピンのマニラに領事館が設置された。明治27年(1894)に日清戦争が終結すると、副島種臣が主宰する「東邦協会」は、外交機

62) 『同上書』p. 114.

63) 山本鋳介はハノイ到着直後の明治30年4月に急逝。岩本は帰国後に『暹羅老樵安南三国探検実記』を書いた。

64) 黒龍会『前掲書』p. 48.

65) 宮崎『前掲書』p. 113.

66) 宮崎『前掲論文』pp. 142-143. 兄よりの手紙に孫文のことが書いてあった。

67) Thainōi, *op. cit.*, p. 719.

68) *ibid.*, p. 722.

69) *ibid.*, pp. 726-727.

関の拡張と外交活動の機敏な展開を主張して、明治28年（1895）11月に日暹条約の締結を訴える建白書を当局に送った。⁷⁰⁾翌年2月に西園寺外相よりタイ側に交渉開始の準備があるかどうかの打診を試みたところ、同年6月にタイ国政府の法律顧問 Kirkpatrick が来日した。⁷¹⁾8月には「東邦協会」が日暹条約締結に際しての各条項に関する細かい意見を発表しているが、中心になって活動していたのは、明治26年（1893）以来幹事長であった稲垣満次郎だった。⁷²⁾稲垣は明治30年（1897）3月初代駐暹羅国弁理公使に任命され渡タイして、「日暹修好通商航海条約」の締結交渉にあたり、翌年2月15日にバンコクで調印を終えた。条約締結交渉にあたり、日タイ両国で問題とされたのは、日本がタイ国において領事裁判権、いわゆる治外法権を獲得しようとした点であった。タイ側は治外法権を与えるまいと、タイ政府総務顧問 Rolin-Jaequemyns をたてての交渉であった。欧米諸国に領事裁判権を握られている日本がタイ国で領事裁判権を取ろうというのは調子がよすぎる、というのがタイ側の主張であった。⁷³⁾結局条約本文では触れずに、議定書において、タイが民法、刑法などを完成させ1年間施行するまでの間、日本は領事裁判権を持つことになった。日本はタイの近代法典編纂を援助する権利と義務を有するようになり、明治30年（1897）11月、日本の外務省委嘱により、タイ国法律顧問として政尾藤吉が渡タイした。⁷⁴⁾同年タイに法典起草委員会が発足すると、政尾を含めた外国人顧問3人とタイ側3人が委員に任命された。⁷⁵⁾明治34年（1901）に Rolin-Jaequemyns が引退してベルギーに帰国すると、総理大臣以上の実権と政府全般にわたって持っていた権限が分割され、財政の顧問にはイギリス人、外交の顧問にはアメリカ人、司法の方は日本人が入るようになり、政尾は司法顧問となって司法省の仕事について責任を持つようになった。

稲垣のバンコクにおける外交手腕は、外務省の後輩である矢田長之助が次のように語っている。「稲垣君の妻君は所謂明眸皓齒、有名な美人であった処からか非常に同王（チュラーロンコーンのこと、筆者注）の御気に入り、従って稲垣公使の宮中に於ける勢力と云ふものは大したもので、列国使臣中其右に出づるものなく、稲垣公使の云ふことは何でも通るといった様な次第で、其頃同王は日本政府部内の改革を全部委任し、日本人顧問も思ふ存分聘用し、其自由

70) 稲垣満次郎「日暹条約の精神及條款」『東邦協会会報』第50号、p. 107.

71) 外務省情報部「前掲論文」p. 65.

72) 稲垣は明治38年（1905）末に駐タイ公使を終えて帰国した。明治40年（1907）スペイン駐在特命全権公使を命ぜられ、スペインに赴くが、在任中に病気で倒れ、翌年11月25日マドリッドで死亡した。享年47歳。

73) 政尾藤吉「暹羅の新刑法に就て」『法学協会雑誌』第25巻（明治40年）pp. 1623-1624.

74) 明治3年（1870）愛媛県生まれ。明治30年（1897）Yale 大学 D. C. L. を取得。最初は総務顧問 Rolin-Jaequemyns の補佐であった。

75) 政尾は全部で7人挙げているが、Trinarong, Praphat. 1962. *Phrachiwaprawat lae ngan khong somdet krom phraya damrongrachanuphap*. Udomsüksa, pp. 482-483. によれば、Raphiphatthanasak 親王、Phichitprichakōn 親王、Phraya Prachakitkonchak, Rolin-Jaequemyns, Kirkpatrick, 政尾藤吉の6人となっている。

の活躍を許す代りに、唯一つ日本に聴いて貰いたいことがあるとのことであった。それは何かと云ふと、暹羅と日本と攻守同盟を締結したいと云ふことであった。⁷⁶⁾ 攻守同盟の話は日露戦争勃発の2年前にあったというから、明治35年(1902年)のことである。結局、日本は日露戦争に入らねばならぬ状態にあり、たとえ名義だけでも日暹攻守同盟は思いもよらぬことと、外務大臣小村寿太郎は稲垣を通じてチュラーロンコーンの申し出を体よく断わらせたという。矢田のいう日本人顧問としては既に政尾がいたが、当時のタイ政府には全ての部局に外国人顧問、いわゆる「お雇い外国人」がいて、実際にはこれら顧問がタイの政治を動かしている「顧問政治」⁷⁷⁾であった。菅沼のいう「雄偉卓犖の士が……其の政府に翼賛し、国政を整理し兵備を完修」する考えや、石橋のいう「政府部内に日本人を入れる」機会がようやくめぐってきて、稲垣によって実行に移されようとしたが、既存の部局では出身国別の顧問の閥ができあがり、高給をもって迎えられた西洋人は確保した地位を容易に明け渡そうとしなかった。⁷⁸⁾ タイ政府の顧問として日本人が加われるとすれば、新設の部局しかなかった。日本側の進言により東北タイの蚕業開発のため、⁷⁹⁾ 明治35年(1902) 農商務省に蚕業局が新設され、農学博士外山亀太郎が技師長となった。⁸⁰⁾ 外山に続いて養蚕技師横田兵之助ら6名が第1陣として渡タイした。養蚕技師らはその後に交替があったが、約10年間バンコクのサーラーデーン、サパトゥムや東北タイのコーラートを中心に養蚕試験所や養蚕学校を設立してタイ人の指導にあたっていた。しかし明治45年(1912) 農商務大臣チャオプラヤー・ウォンサーヌプラパット (Čhaophraya Wong-sanupraphat) の配転、ラートブリー親王 (Phračhao Lukyathoe Krommamūn Ratburidirekrit) の大臣就任で、蚕業局は全廃され、⁸¹⁾ 最後まで残っていた横田も翌年帰国してしまった。⁸²⁾

蚕業顧問就任と同じ年の明治35年(1902)、文部大臣パーッサコーラウォンが辞職し、ダムロン親王 (Phračhao Nōngyathoe Krommamūn Damrongrachanuphap) が文部大臣に就任すると、稲垣の許へ教育顧問招聘の話が届けられた。⁸³⁾ この話は、同年皇太子ワチラーウット (Somdet Phračhao Lukyathoe Čhaofa Maha Wachirawut) が欧州留学からの帰途、日本

76) 矢田長之助「暹羅に関する思出で」『暹羅協会々報』第9号(昭和12年) p. 77.

77) 政尾「前掲論文」p. 1628.

78) 外務省外交史料館所蔵(3, 8, 4, 16)『外国官庁ニ於テ本邦人雇用関係雑件』『別冊暹羅国の部』によれば、明治30年(1897)11月4日司法省司法顧問として政尾が契約した条件では、年俸1,000ポンドとなっている。当時の為替相場は1ポンド=10円80銭であった。

79) 「前掲外交史料文書」中の「暹羅国政府ニ於テ本邦蚕業技師及工女雇聘一件 自明治34年」

80) 「前掲外交史料文書」実際は蚕業局局長に等しい権限と業務を与えられていたが、Krasuang Kaset. 1966. *Prawat krasuang kaset*. (『農務省史』), p. 24. によれば、外山についての言及があり、明治36年(1903)に就任した Phenphatthanaphong 親王が初代局長であったかのような不確定な記述になっている。

81) Krasuang Kaset, *op. cit.*, pp. 24-25. によれば、明治42年(1909)に局の名称が「蚕業局」から「作物局」に変更している。

82) 「前掲外交史料文書」

83) 「前掲外交史料文書」

に立ち寄り、日本の女子教育諸施設を視察したことが契機となって、⁸⁴⁾王妃が王族子女のための学校を設立することになり、3名の女教師を日本から雇い入れるということになったのである。明治37年(1904)女子高等師範学校教授安井哲子と、その助手として後輩の河野清子、中島富子の2名が同行した。⁸⁵⁾英国留学から帰国して数年もたたぬうちに、思ってもみなかったタイへ派遣される話を、安井は驚き、望まなかった。安井は留学より帰国してキリスト教に入信していたが、官学ではキリスト教は危険思想であったというから、⁸⁶⁾母校に戻った教育学者安井にとって、キリスト教入信が不利に働き、志とは異なるタイの地へ赴かねばならなかったようである。ともあれ無知、無理解と、傲慢な王族貴族を相手に、安井らの根気ある努力によって「ローンリエン・ラーナー皇后女学校」が誕生した。安井は3年の任期を終えると再び英国へ留学し、後任はテーワウォンの娘で安井の助手をしていたピチットチラパー (Phičhitčhirapha) が引き継いだ。⁸⁷⁾

同じ明治35年(1902)帰国したベルギー人法律顧問 Schlessor の後任として日本人顧問を求める話が出たものの、⁸⁸⁾フランスの圧力がかかって立ち消えとなり、結局フランス人顧問 Padoux が補充された。明治38年(1905)には、海軍軍医と海軍兵学校の招聘の話が日本側に持ち込まれた。⁸⁹⁾軍医の話は日本の申し出額が高額という理由で、アメリカ人軍医を引き続き雇うことになり、海軍兵学校教官の話も引き続き北欧人を雇うことになって、日本人の招聘は実らなかった。日露戦争での日本海軍の勝利から出たタイ側要人の思い入れも、⁹⁰⁾既に築かれた顧問の閥をつき破ることはできなかった。

司法顧問政尾は満16年タイ国に滞在し、その間タイ国新刑法、民商法の起草にあたり、大正元年(1912)にはプラヤー・マヒトーンマヌーパコーンコーソクン (Phraya Mahithōn-manupakōnkosonkhun) なる爵位と欽賜名を受け、⁹¹⁾翌年帰国した。政尾が16年間もタイに滞在し、欧米人に伍して仕事を続けることができたのは、日本人離れした強靱な体質と骨太い感覚の持主であったからに違いない。政尾は16年間の滞在で得た感想として、「日本人は依然たる花綵列島の主人公、蓬萊の女仙である。彼等は男装して、葡萄の汁を啜り、乾肉を含んで、東

84) 山口武「シャム滞在時代の安井女史に就いて」青山なを編『安井てつ先生追想録』安井てつ先生記念出版刊行会(昭和41年) p. 10.

85) 青山なを『安井てつ伝』第2版(昭和51年) p. 105. では「河野キヨ」「中島とし」となっており、安井の場合も「安井哲子」「安井て津」「安井哲」「安井てつ」と変化しているが、ここでは渡タイ前に外務省に提出した履歴書に従った。

86) 青山『前掲書』p. 97.

87) 山口「前掲論文」p. 12. ; Pramuanwitthaya, *op. cit.*, p. 435.

88) 「前掲外交史料文書」

89) 「前掲外交史料文書」

90) 明治38年(1905)にはタイ国海軍は12名の海軍留学生を日本に派遣し、その後も水雷艇3隻(明治43年竣工)、水雷駆逐艇2隻を日本に発注している。明治39年(1906)には陸軍大臣 Nakhōnchaisi 親王が軍事視察のため来日している。タイ側の関心の高さがわかる。

91) Damrongrachanuphap, Somdet phračhao bōromwongthoe krom phraya. 1969. *Tamnan khrūang ratchait̃sariyaphōn čhunlacōm klao*. Krom Sinlapakōn (『ラーマ5世王勲章叙勲誌』), p. 176.

洋の大陸に入り、その土地について大和民族の故郷を建設するの体質がない、同時に勇気がない。かくて亜細亜モンロー主義を唱え、東洋の治安を希ふが如きは、対岸の火災を防ぐが如きもので、その努力の効果の甚だ痛切ならざる恨みがある。』⁹²⁾と、日本人の体質改善を説き、それに幾世紀も要するとすれば、日本人の体質にあった「安南、トンキン、暹羅、南支一帶の土地を以て日本人の発展に最も適した場所と思」⁹³⁾い、日本人が海外発展を願うなら「恰もその故郷に居るが如き体素を具備しなければならぬ。』⁹⁴⁾と説き、第1次世界大戦で巨利を得ておきながら、大陸経営に投資せずして「大アジア主義」を実行しようとする浅薄さを批判している。血気にはやる明治時代の「アジア主義」者を経て、豊富な体験と確かな判断力を持った理知的な、大正時代の「アジア主義」的「南進論」者を政尾に見出すことができそうである。⁹⁵⁾

お わ り に

アジアへの進出をもくろむ欧米諸国から、アジアを守るために、アジア諸国の連帯を主張する平戸出身の浦、稲垣、菅沼らは、その主張に多少の相違があり、侵略を手段とするにもかかわらず、すぐれて「アジア主義」者であり、ことに稲垣、菅沼は視野を太平洋、「南洋」に向けた「南進論」者でもあった。

フランスの侵略に対する憤慨とタイ国への同情から、タイ国へ渡っていった石橋、岩本らもまた、心情において「アジア主義」者であったと呼ぶことができる。しかし、渡タイした心情的「アジア主義」者たちが、移民事業を介してタイ国にかかわった時に、いくつかの問題が生じた。まず渡タイした心情的「アジア主義」者たちに、熱情はあっても実務能力が欠けていた点である。移民事業の大失敗がそれである。また移民事業を通じてかかわり合う相手側としては、当時は政界の実力者ではあっても、政界の主流から排除されていく貴族であった。

新しく政界の主流をなそうとしていたのが、国王の弟や王子という直系出自で、ヨーロッパ留学や欧米人の教育を受けた王族たちであったため、「アジア主義」的連帯よりも、「欧化」に関心があり、日本の「欧化」に関心を示しても、日本からの「アジア主義」者たちには関心を示そうとしなかった。むしろ、欧米人顧問の前面に立って、日本人を排除しようとする傾向さえ見られる。ただ、欧米人からの教育を受けたもののヨーロッパ留学を果たさなかった国王チュラーロンコーンやダムロン親王においては、日本に寄せる関心が伺えるが、それも日本が日清戦争や日露戦争に勝利したという背景があったからであろうし、日本人顧問の受け入れより

92) 政尾藤吉「大陸経営者としての日本人」『東方時論』大正6年正月号, pp. 24-25.

93) 「同上論文」p. 25.

94) 「同上論文」p. 25.

95) 政尾は帰国後、大正4年(1915)郷里愛媛県選出の衆議院議員となり、大正6年再選され、大正9年には南洋視察団団長となって東南アジア各地を巡る。同年12月駐タイ国特命全権公使に任命され翌年2月着任。しかし大正10年(1921)8月11日脳溢血のため任地バンコクで急死した。享年52歳。

も、日本の天皇制や絶対王制にかかわる関心ではなかっただろうか。

明治中期の「アジア主義」的発想の基に、タイ国に播かれた日本の種は、新刑法、養蚕学校、「皇后女学校」とあるが、新刑法はあとから来たフランス人 Padoux の功績にされてしまい、養蚕学校は一旦消滅してしまう。タイ赴任を嫌がり、在タイ期間を人生最大の暗い寂しい時期と回想する安井であったが、安井の開設した「皇后女学校」だけは今まで連綿と運営され、バンコクの名門校になっている。安井⁹⁶⁾の日本の女子教育発展に尽した足跡もさることながら、タイにおける女子教育の端緒を開いた功績も大きく、今なお受け継がれている。

（本稿は昭和52年度文部省特定研究「アジアの文化摩擦」の中の「日本の南方関与と文化摩擦」班での研究成果の一部として執筆した。）

96) 安井は明治40年（1907）に皇后女学校の任期3年を終えると（38歳）、帰国せずそのまま再度の英国留学に向かった。翌年帰国して、学習院講師、東京女高師教授を歴任し、大正8年（1919）には国際連盟事務局次長、大正12年（1923）から昭和15年（1940）まで、東京女子大学学長の職にあった。昭和20年（1945）12月2日、腰骨骨折が原因で死亡した。享年76歳。